

袂と袖

第五十四話 平成三十一年三月七日

武士は、左右の袂に小石を重しに入れておいた。歩いているときも座ったときも袂がピッと張り、キリリと見える。

袖を振れば即、相手の頬を叩くことができる。険悪な状況に際しては目潰し用の砂や寸鉄も袂に隠した。

ときはいま。拙者、不要になった鋤 {はばき} 二つを重し代わりにしている。

路上の有事に際して不埒者の顔面に投げつける為でもある。ほかにはティッシュペーパー、スイカをそのまま放り込んでいる。そのため袂糞 {たもとくそ} が溜まる。

小袖が下着から衣装になったのは安土・桃山の世。袂との付き合いは永い。

武士は、袂を分ったり、袂を連ねたり。女は袂に縫がったり、袂を絞ったり、袂の露だったり。袂は日本人に寄り添ってきた。

そう、袖もそうだ。「袖振り合うも多生の縁」からはじまり、敬意を表する仕草の「袖打ち合わす」。物乞いすることを「袖をひろぐ」。人を誘う「袖を引く」。初めて着るときは「袖を通す」

袖は古く万葉集によく出てくる。

袖は袂より顔に近かったせいで、袂以上に涙と連携する。

「袖に時雨しぐる」「袖に縫がる」「袖振る」「袖を濡らす」「袖に湊 {みなと} の騒ぐ」「袖の雨」「袖の海」。みな涙で袖が濡れるの意味。

男女の機微もある。「袖に墨付く」→人に恋い慕われるきざしがあること。

「袖を片敷く

」→衣の片袖を敷いて一人寝をする。「袖纏 {ま} き干す」→共寝して、涙に濡れた袖を干す

洋装のいま、ポケットが幅を利かす。涙拭く袂も袖もハンカチーフ。

そう、武士は袂でも袖でも手ぬぐいで涙は拭かぬ。手の甲で拭う。涙の意味を肌で記憶しておくため。

